

は い づ め 遺 跡 (1986 年)

—岐阜県揖斐郡徳山発掘調査略報—

大 参 義 一・佐 々 木 明

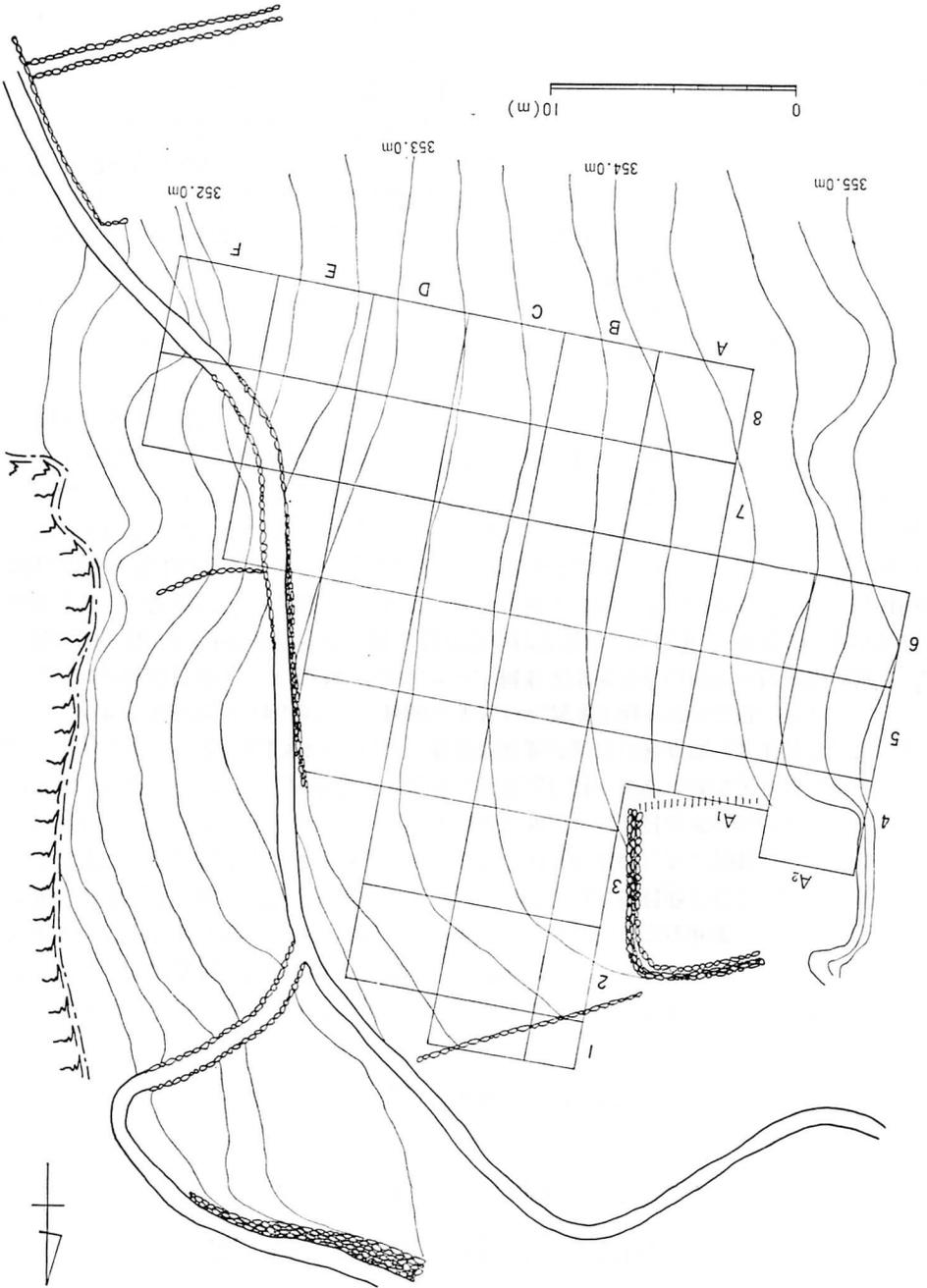
本略報は「徳山ダム水没地内遺跡発掘調査」の初年度分にあたる岐阜県揖斐郡旧徳山村は
いづめ遺跡(岐阜県遺跡番号G 19 T 06373)の発掘調査略報である。旧徳山村では、ダムが海
抜約400m以下を水没させる予定であり、水没予定地内の埋蔵文化財調査の必要が生じた。
ダム建設事業主体である水資源公団の調査依頼を岐阜県教育委員会が受託し、事務局を同委
員会文化課におき、関係町村教育委員会と協力して調査を開始した。1949年以降は小川栄一
が、閉村の動きが活発化した1975年以降は篠田通弘等の「徳山村の歴史を語る会」が旧徳山
村内で遺物採集を続けた結果、水没予定地域の埋蔵文化財の概要はほぼ明らかになっていた
が、上記調査依頼の受託後1983年に岐阜県教育委員会は独自の分布調査を実施し、1985年
には長期にわたる発掘調査計画をたて、1886年4月から調査計画を実行に移した。

本遺跡は旧徳山村大字戸入字はいづめにあり、揖斐川支流西谷川西岸の比高10m以上の段
丘(海拔350-370m)上に位置する。西谷川対岸の村平遺跡(晩期等)、本遺跡と小流を隔て
て北接する小の原遺跡(早・前期等)、同じく西谷川西岸に南接する障子暮遺跡(篠田、1986:
p. 164)からは縄文時代を主とする遺物を採集できるから、本遺跡は西谷川沿に分布する戸入
遺跡群の一角をなすともいえる。篠田通弘が1978年に本遺跡を発見し、1986年度調査区域南
東端の電柱の穴で採集した遺物から縄文晩期を中心とすることを確認した(ibid; p. 162)。
表面採集等による本遺跡関係記事は岐阜県教育委員会、1985: p. 11. 篠田、1981: pp. 31・
32, 1986: pp. 162-163にある。

今年度は範囲確認の必要から遺跡展開予想地帯の中心部に限って調査区域を設定した。調
査区域(図1)の北半分は西側山体から東に突出した尾根の末端にあたり、南半分はこの尾
根から段丘南端の小溪にいたる緩斜面上にある。以下では調査区域を、遺物出土の少ない中
央部(24グリッド・472m²)と黒色土層から多くの遺物が出土した周辺部(15グリッド・188
m²)とに大別する。中央部をさらに、遺物包含層が最も薄く遺物が最も少ない中央部北側(A
-3~5, B-3~4, C3)、土器のやや多い南東端近くを除けば遺物包含層が薄く遺物の少ない中
央部中央(A-6, B-5~6, C-4~D6, E6)、遺物包含層と連続的な層はあるが南東端近く以
外では遺物の少ない中央部南側(A-7~8, B-7~8, D-7~8)の三つに細分し、周辺部も、
土器は少ないが石器のやや多い北側(A-1~2, B-1~2, C2)・西端(A₁-4~6, A₂-4~6)、
土器・石器ともに多い南東端(E-7~8, F-7~8)に三分して記述する。

今回の調査期間は6月25日から8月21日までだった。6月27日にグリッドを設定し、6月
28日から7月2日まで平板測量、7月1日に掘削作業に入った。中央部南側から掘削したの
で、当初の遺物出土は低調だったが、中央部中央にかかった第2週から出土遺物が増え、そ

图 1: 地形测量图



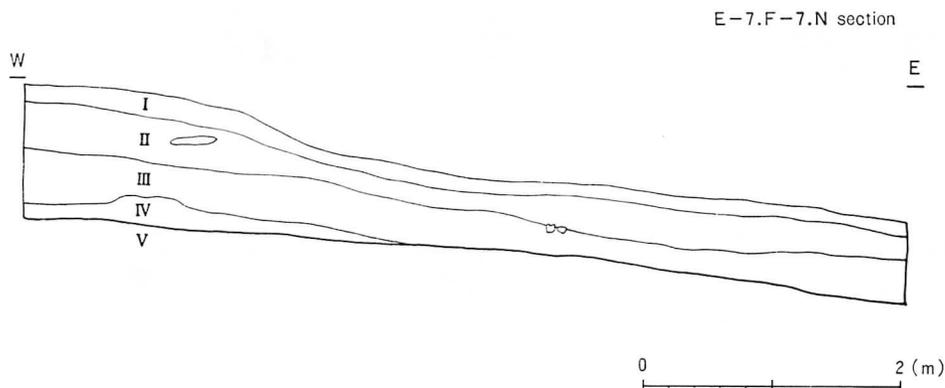


図2：層序図 (E-7. F-7. N section)

の後中央部北側・西端・南東端・北端の順に作業をすすめるに従って遺物量が増大した。8月13日までに掘削作業を終え、同18日から20日までに埋めもどし、同21日に作業を終らせ、事務所を閉鎖した。

調査区域では、表土層 (I層)、褐色土層 (II層)、黒褐色土層 (III層)、褐色・茶褐色砂礫層 (IV層) がローム層 (地山: V層) の上にある (図2)。II層にも若干の歴史時代遺物が含まれるが、III層が先史時代の遺物包含層で、黒褐色土を明瞭に認めにくい地点でも先史時代の遺物のほとんど全部がこの層に相当する深度から出土した。多くの地点でIII・IV層相当深度で歴史時代遺物が出土し、図には示さないが、耕作等による攪乱層 (VI層) のあることが確認された。とくにV層が地表に近い中央部北側を中心とする一帯には桑栽培によるとみられるやや深い攪乱がほぼ等間隔に入っていた。

径1—3cmの小礫を含むII層は調査区域を広く覆うが、南東端では欠落する。稀に近代陶磁器等を出土することから、表土 (I層) と同じく近代に形成された土層とみることができよう。

III層およびIII層相当部分 (IV・V層直上) からは石器とともに大量の縄文時代晩期の土器片が出土した。しかし、少数ではあるがほぼ全期にわたる縄文時代各期の遺物、弥生時代の遺物もこの層から発見されている。III層もほぼ調査区域全面に広がるが、中央部北側ではIV層上面が高くIII層がもともと薄い上に、攪乱が激しく、場所によってはIII層を確認しにくい。中央部北側から、北端・南東端・西端に近づくにつれ、III層の土色は黒褐色から黒色へと変化し、包含遺物量も増える。特に南東端では著しく黒色の厚いIII層が発達し、包含遺物も極めて多かった。

IV層は、径数cmからこぶし大までの円礫をほぼ一様に含み、中央部北側を中心に西 (山側) から東 (谷側) へと舌状に広がり、北端近くでは急に、中央部中央では次第に消滅し、谷側では層厚をまして一部で砂層化する。

今回は調査区域が狭かったので、層序の形成過程を明らかにできなかった。

中央部中央II層から歴史時代の石組基部らしい遺構が出土したほか、西端・北端で出土し

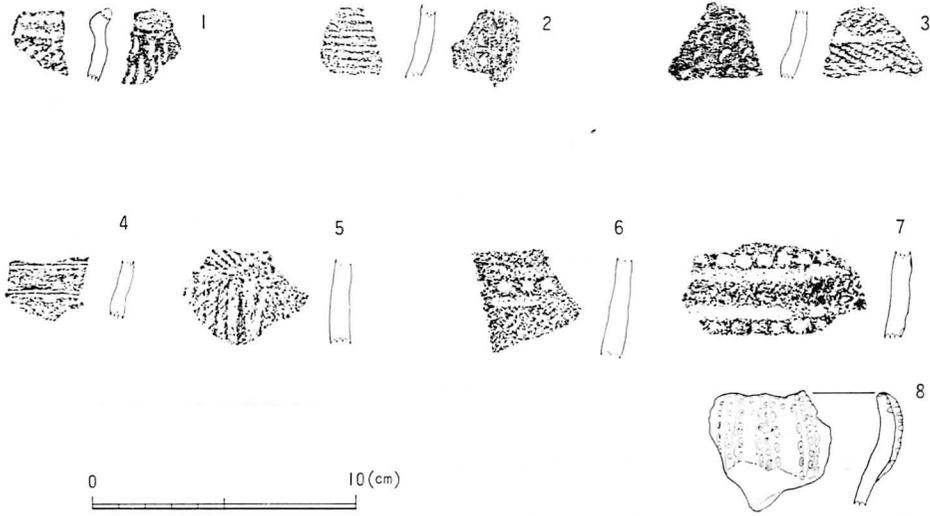


図3：出土土器（1～8）

た集石・礫集中も遺構なのかもしれない。

土器

検出された縄文時代以降の土器はほとんどすべて第Ⅲ層から出土したので、層序により時期を区分できなかった。器面の磨減が激しいなど遺存状態が劣悪なので、器形分類・調整観察は困難だったが、ほぼ五貫森期・下り松期に比定できる縄文晩期の土器が大多数を占めることを確認できた。

縄文前期（図3：1-3）

北端・西端から3点出土し、同一個体とみられる。1は一部破損した口縁部であり、ナデ整形後、表に斜めの無節縄文、裏にツメ形文を施す。

縄文中期（図3：4-8）

4は半截竹管で横線を2本引いている。5の縄文は上半では斜めに下半では横位に施してある。6・7は同一個体で、上下に各1列ずつ棒状工具で刺突を加え、各列の内側に各1本ずつ沈線を施し、その内側に縄文を斜めに施す。8は口縁部破片で、細い隆帯を貼り付け、その上と両側を棒状工具で刺突し、裏を磨いている。

縄文晩期土器（9-143）

以下のように分類した。

第1類 粗製土器

第2類 半精製土器

第3類 無文精製土器

第4類 有文精製土器

第5類 その他の精製土器

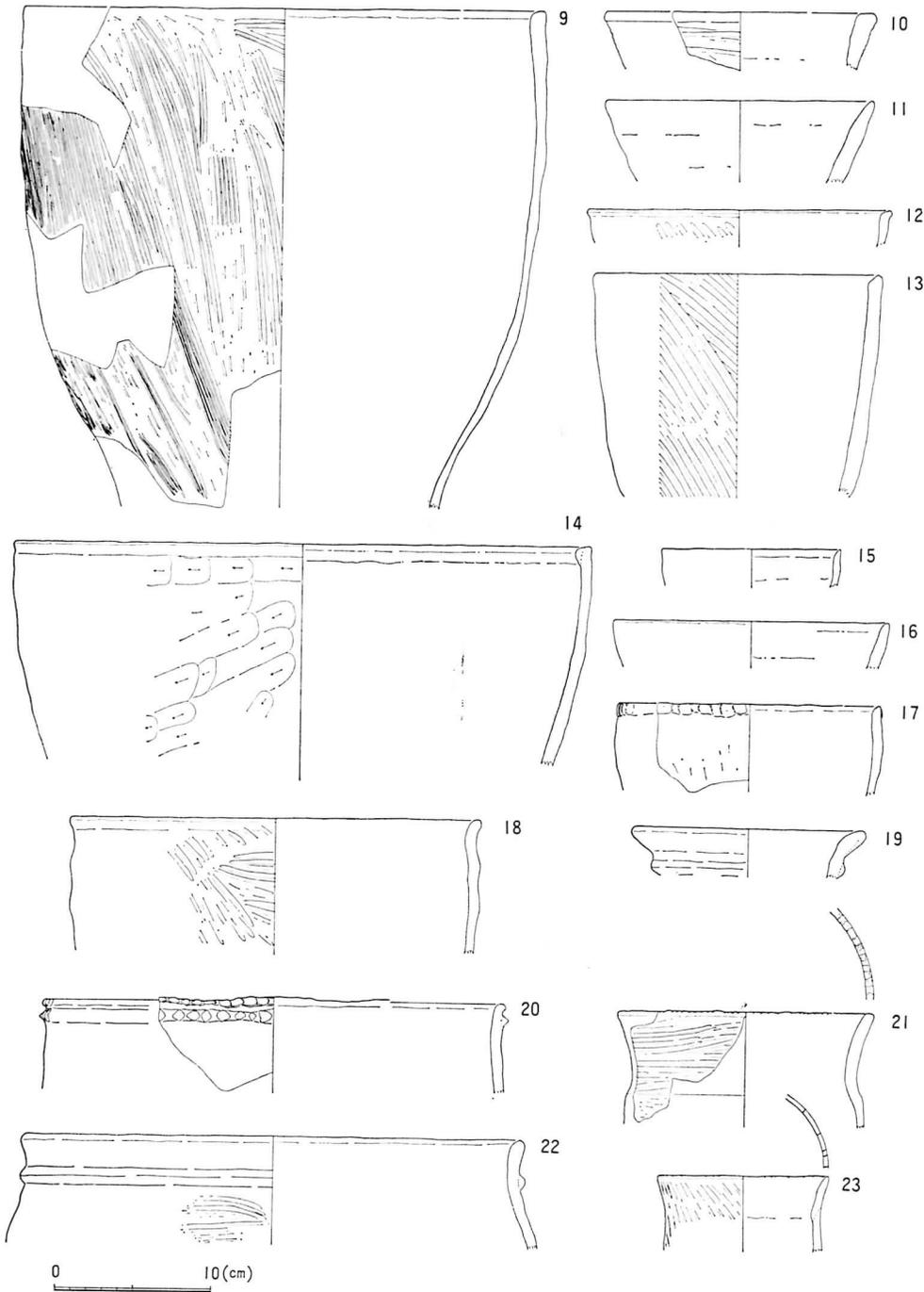


図4：出土土器（9-23）

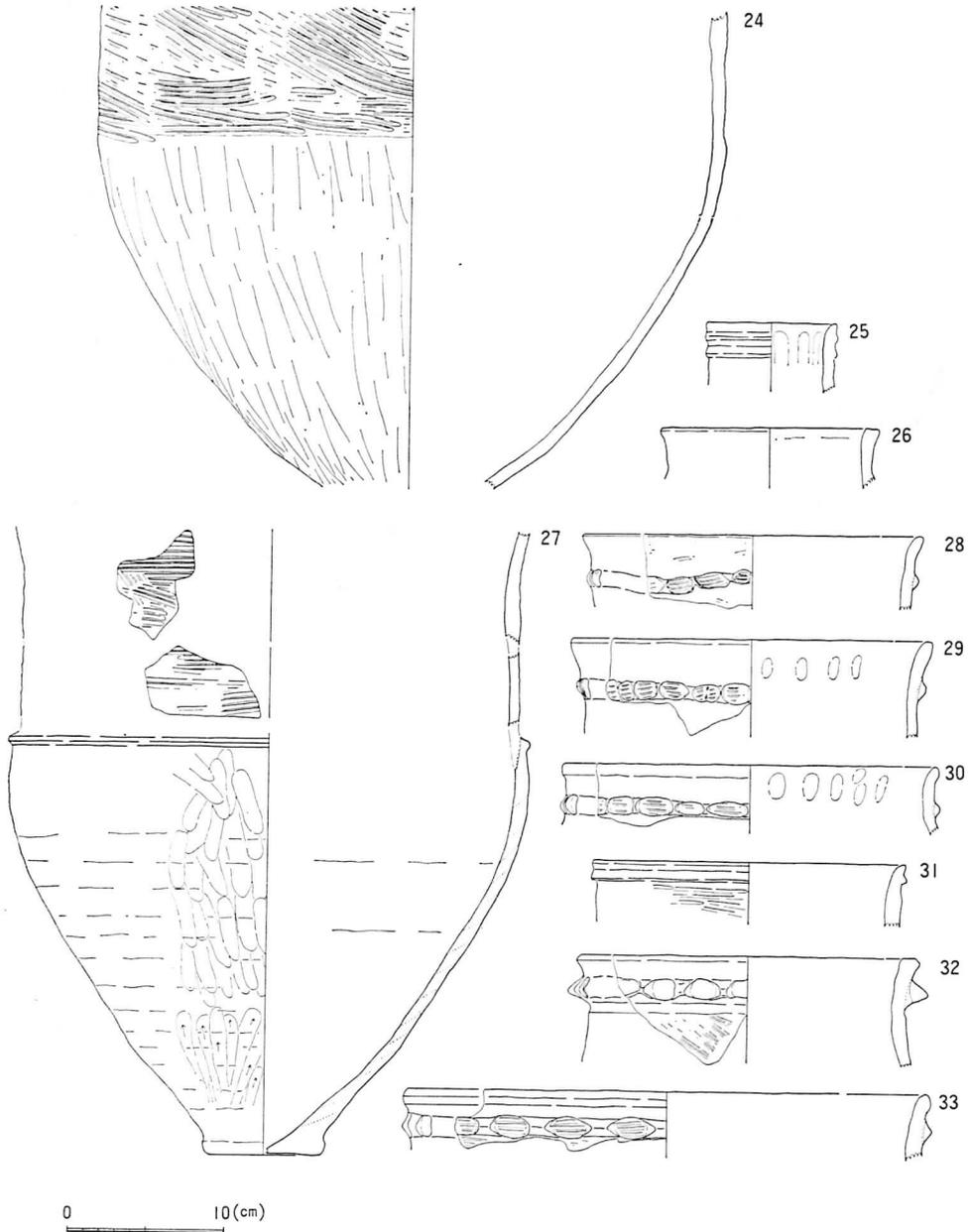
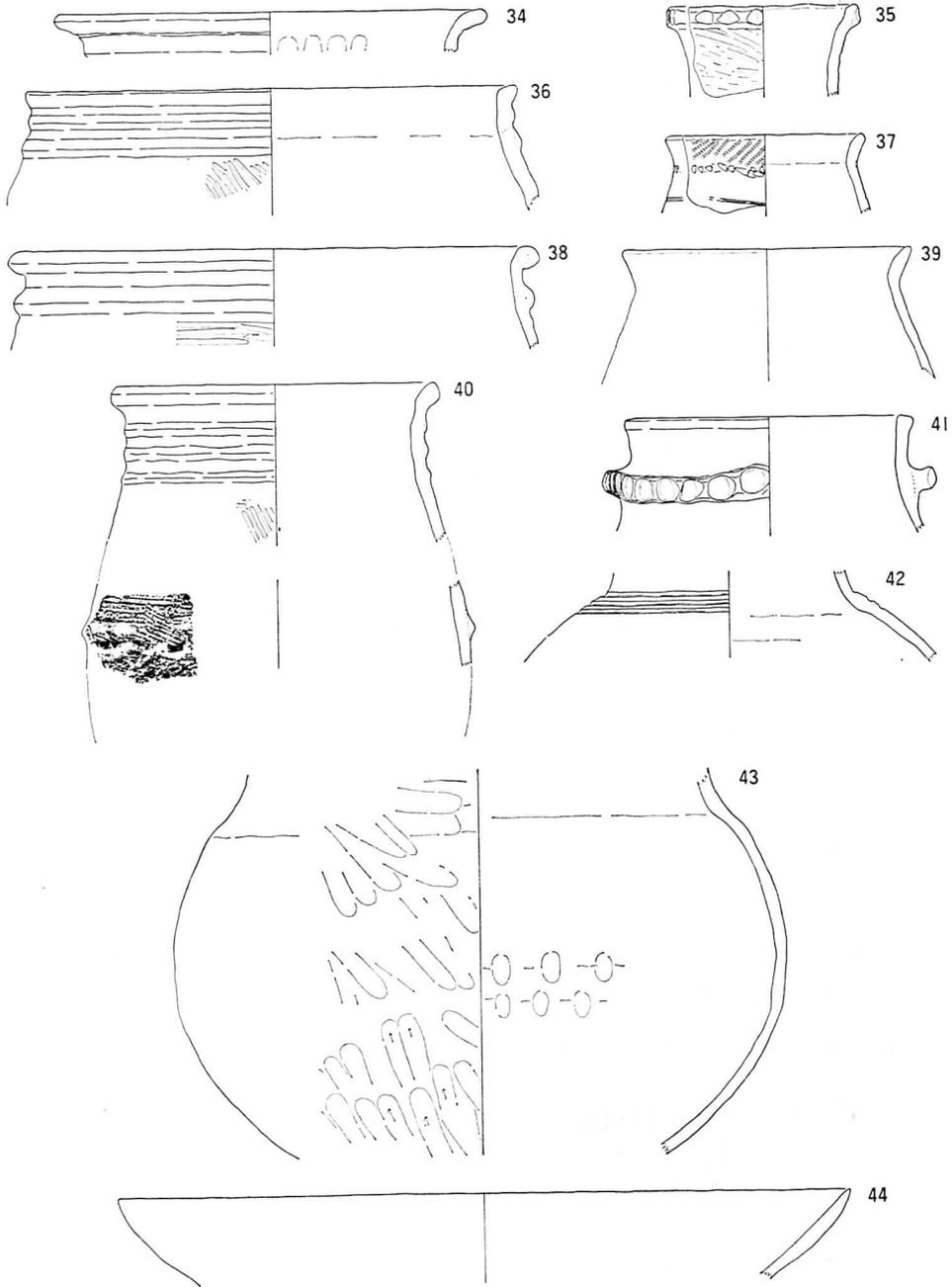


图 5 : 出土土器 (24—33)



0 10(cm)

図 6 : 出土土器 (34—44)

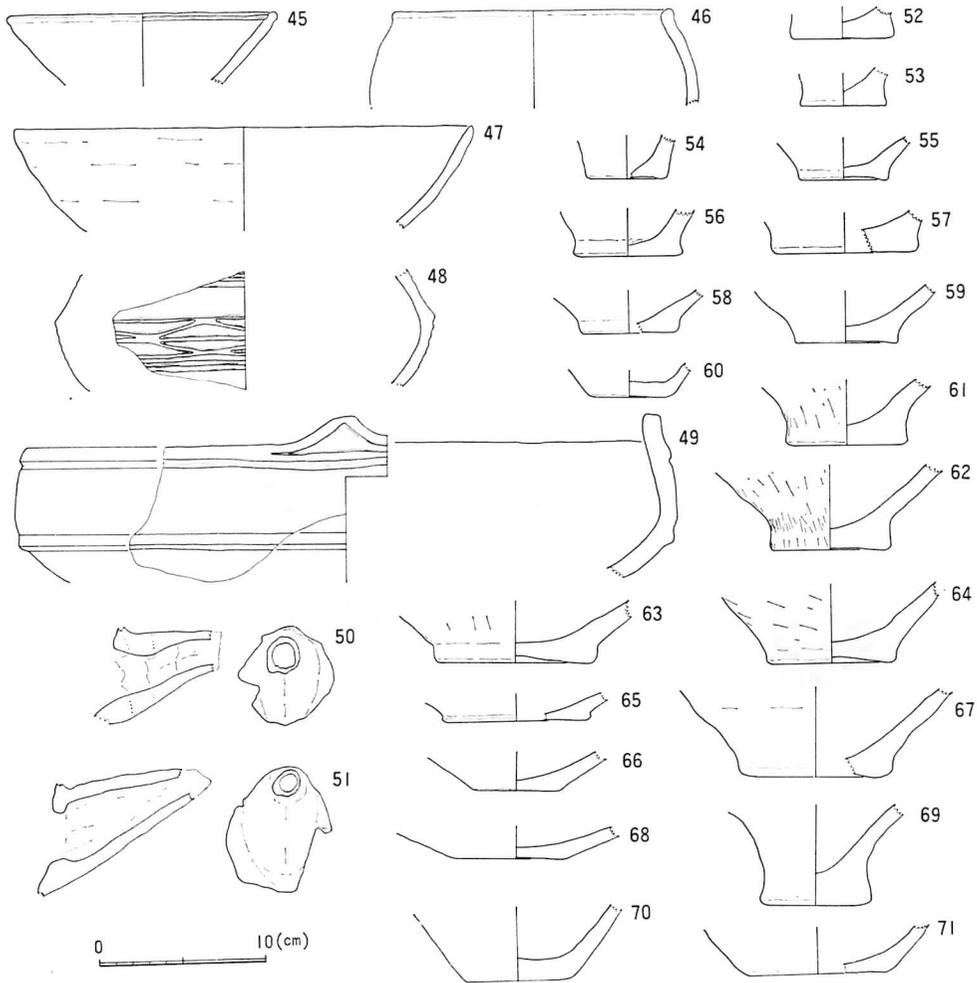


図7：出土土器（45-71）

ただし、磨滅した小破片が多いので錯誤の可能性を完全には排除できない。

第1類 粗製土器（図4：9-14・18，図8：72-77・79・80）

アナダラ属の貝，半截竹管，櫛状・棒状工具などでひっかいた跡が条痕として残るもの。ナデ整形・削痕を残すものも含める。貝殻条痕が量的には最も多い。器形は突帯をつけず単純である。

深鉢（9-14，18，73-77・79・80）

9・10・12・18・74は貝殻条痕を残す。土器棺用の9では，外側の貝殻条痕と内側の磨きが口縁部近くでは横位に，胴部では斜位に走る。口縁端部でナデ整形により平坦面を造出する（10・12・13・14・74も同様）のが下り松期の特徴と一致する。73は細密条痕を残す唯一の例である。75ではへら状工具を用いるが，凹凸が激しく，磨きには至らない。76・77は棒状工具による条痕を残し，76では円形沈線も認められる。79に残る削痕の削りの方向は貝殻



図 8 : 出土土器 (72—86)

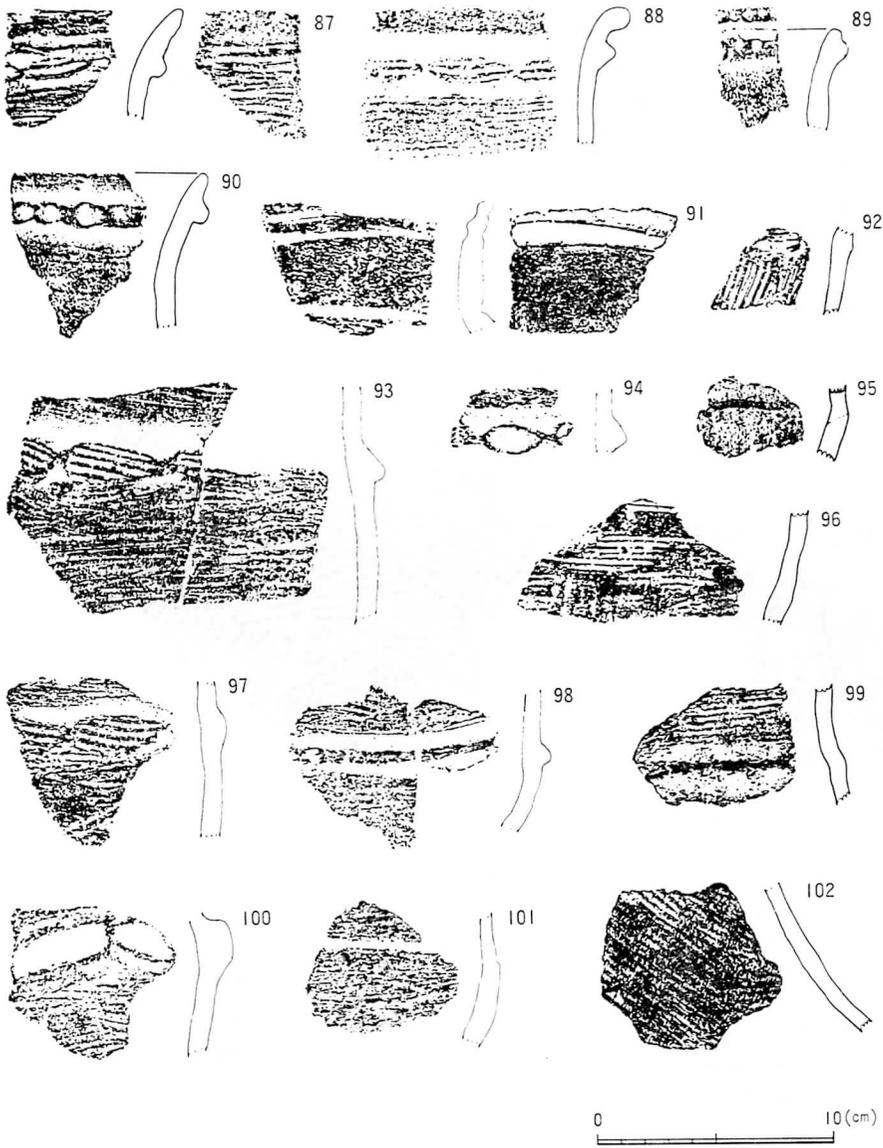


图9：出土土器（87—102）

条痕とほぼ同様である。半截竹管による条痕を残すものは2個体分にとどまった。80は底部に近い部分の破片である。10・11・72は同類(小形の深鉢か鉢)に属するとみられ、10・72は貝殻条痕、11は顕著な凹面をつくるナデによって整形されている。

第2類 半精製土器(図4: 17・19-23, 図5: 24-33, 図6: 34-36・38・40, 図8: 81-86, 図9: 87-101)

最も中心的なカテゴリーで、口縁部・頸部に突帯のある深鉢・甕を主体とし、貝殻での押し引きもみられる。甕では、頸部に貝殻条痕、胴部に削痕を残すのを基本とする多様な変形がある。

深鉢(17, 20, 81-86)

17・20は、ヘラ状工具で押し引きをめぐらせた口縁部貼り付け突帯以下を削痕(17)・ナデ(20)で整形する。81にその直下部分とみられる82をつなげると大型棒状工具等で左から右へ押し引きした2列の突帯とその下方につづく斜めのナデが認められる。83・85は貝殻による押し引きをめぐらせた突帯のある下り松期の指標的資料である。とくに83の口縁では端部を内側に折り返す下り松期の特徴が観察される。86の口縁部には指かヘラによる圧痕がある。84の突帯にはヘラによる刻みがある。

甕(19, 21, 23-36, 38, 40, 87-101)

晩期土器の主流器種である。21・23では、頸部に貝殻条痕、胴部に削痕、口縁端部に貝殻押し引きがみられる。24・96の頸部貝殻条痕・胴部削痕の整形パターンは基本的だが、頸部くびれの退化が著しい。27は24と同じく甕棺とみられる。27では、頸部くびれに突帯をつけ、貝殻条痕(頸部)・ケズリに至らない粗いミガキ(胴部上半)・ケズリ(削痕: 胴部下半)で整形し、輪積み痕が顕著である。28-30, 33, 87, 88は半精製甕の最頻タイプで、口縁がやや外反し、口縁端部の下に突帯を貼りつけて貝殻押し引きをめぐらせ、突帯以下にも貝殻条痕を残す。87は内側に貝殻条痕を残す孤立例である。88のように口縁を内側に折り返す例は非常に多い。25・31は、口縁直下に付けた三角形断面の突帯の下に貝殻条痕の横走る点で同一タイプとみられる。25は小型で壺なのかもしれない。26は、口縁の形から甕に分類したが、口縁がやや外反し、端部平坦面をナデで作り出した唯一の例である。19・22・34・36・38・40は、口縁の傾きがやや特異で、数本に及ぶことの多い比較的幅の広い突帯の下に貝殻条痕が横走または斜走する。40は、上から順に横走→斜走→横走と変化する貝殻条痕を施した頸部のくびれ部分に貝殻押し引きのある突帯をつけた唯一の例である。32は、指で押圧を加えた突帯の下に貝殻条痕を残す。78は32と同一個体で、下り松期より若干新しいのだろう。89・90の口縁外反は比較的大きく、89では突帯・口縁端部にヘラ押し引き、90では突帯に指圧痕が認められる。91は、口縁部内外面に沈線があり、磨滅して確認しがたいがミガキを施した形跡があり、精製土器なのかもしれない。92・93・97は貝殻条痕のある頸部のくびれに貝殻押し引きを施した突帯をつける。胴部には貝殻条痕(93)、棒束状工具または貝殻条痕(92)、削痕(97)を認める。94(頸部破片)の突帯上には指らしい圧痕がある。95・99は顕著な頸部くびれを共有するが、頸・胴部の調整方法の組み合わせは、95でミガキ・削痕、99で貝殻条痕・ミガキと異なる。98は、頸部のくびれについての突帯(27と同様)より上には貝殻条痕、下には削痕を残すが、胴部の丸みが急で小形なのかもしれない。100は突帯上に指の押し引きのある特異例である。101は、くびれの段が鋭く、頸・胴部ともにミガキがなされているので、精

製土器に分類すべきなのかもしれない。

壺 (35, 102)

35は、口縁端部に棒状またはへら状工具で押し引きを施した突帯をもち、頸部に貝殻条痕を残す。102では貝殻条痕が斜走し、下り松期より新しいとみられる。

第3類 無文精製土器 (図4: 15-16, 図6: 39・41・43・44, 図7: 45・47, 図10: 103-117) 内外面にミガキがみられる資料で、突帯・沈線のある事例を含む。

深鉢 (15・16, 103-107)

16は輪積み痕を残し、内面にミガキが残る。105-107の内側には沈線がある。全体に小形で、先のやや尖った口縁をもつものが多い。

壺 (39, 41, 43, 108-109)

39・108の内外面にはミガキを入念に加え、削り出し状の突帯のある108の胎土は赤褐色を呈し、本遺跡では特異例である。41の突帯には指の押圧を認める。43は甕に似るが胴部形態から壺と判断され、胴部外面上半は粗いミガキ、下半はケズリ、ナデのままの内面には指頭圧痕・輪積み痕を残し、半精製土器に分類してもよいのかもしれない。109の頸部直下には沈線があり、類例が馬見塚遺跡から出土している。

鉢 (110, 111)

内外面とも入念なミガキがあり、110は両側回転穿孔を焼成後に加えている。

皿 (44, 45, 47, 112-114)

44・47・113の内外面にはミガキがあるが、47ではミガキが粗く輪積み痕が残る。45(内側)・112(外側)には沈線が認められる。114の内側には突帯がある。

浅鉢 (115-117)

肩部の顕著なくびれは、西日本の当該期事例との関連を示唆する。115の口縁内側には沈線、116の外側には突帯がある。

第4類 有文精製土器 (図6: 37・42, 図7: 48-49, 図10: 118, 図11: 119-135)

浅鉢・壺が多く、沈線・浮線網状文を施した大洞系土器が大半を占める。数型式にわたるとみられ、他遺跡との併行関係を知る上で重要である。

深鉢 (118, 120, 121)

118のモチーフは大洞Aに比定できるが、工字文的技法を採用した小形の深鉢で、山形突起のついた口縁は波状をなし、内面に沈線を認める。120・121は小形の深鉢・鉢だが、120は大洞A、丹彩を施した121はモチーフから大洞B-Cの派生的類型とみなしうる。

壺 (37, 42, 122-132)

37は、口縁に縄文、くびれにへら押し引き、胴部に一本の沈線をめぐらしす。122, 124, 128は丹彩を施し、モチーフも121に類似するので、大洞B-C系とみてよい。124・128は同一個体でヘナタリで沈線を引く。42・123・131・132の頸部附近には沈線が2本めぐり、大洞系らしい。127・132にもヘナタリによる沈線がみられる。126・130の沈線は渦巻状に走り、東海から中部高地にかけて類例の多いタイプだろう。125とその直下にあたるとみられる129の全面に縄文が施され、貼り付けではない削り出し風の突帯がある。

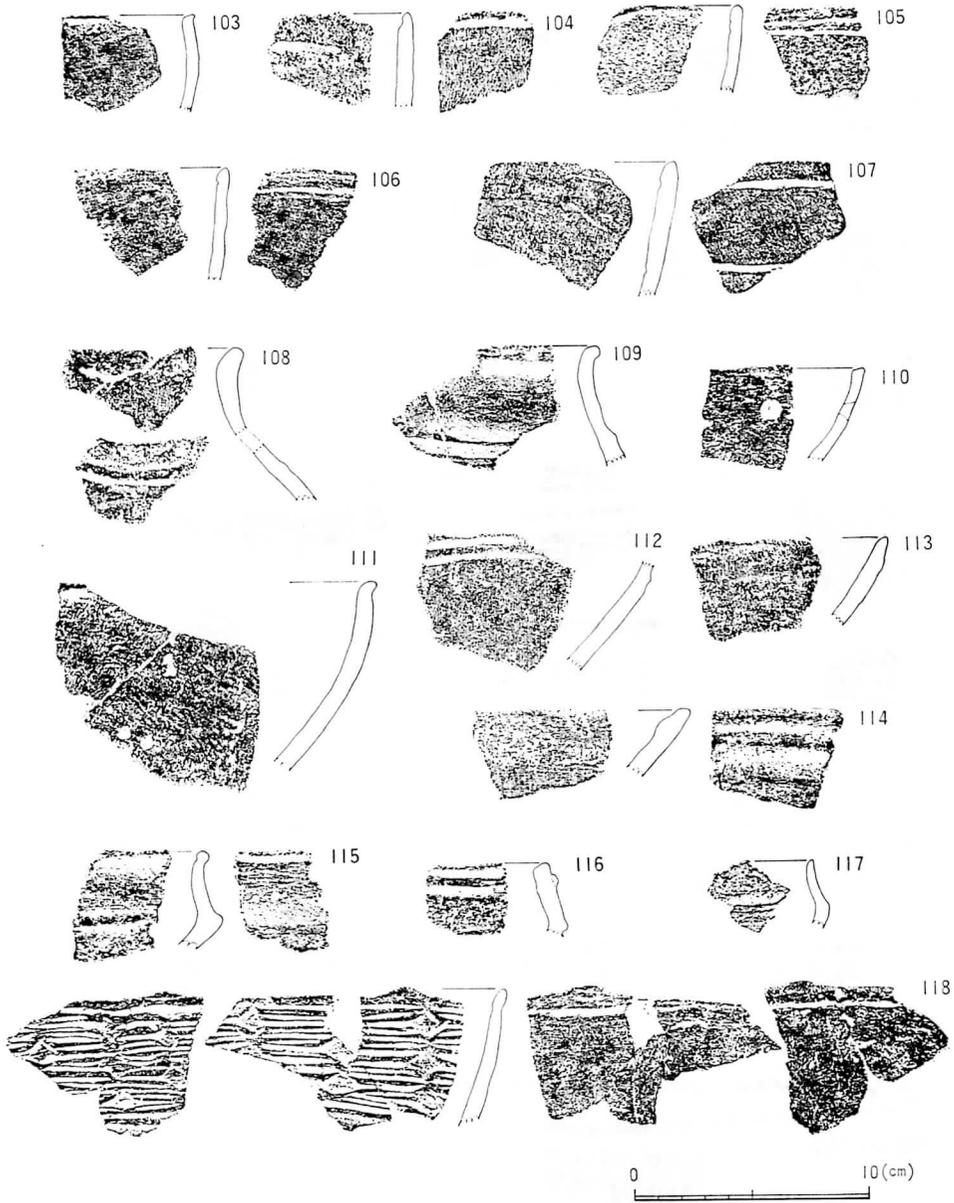
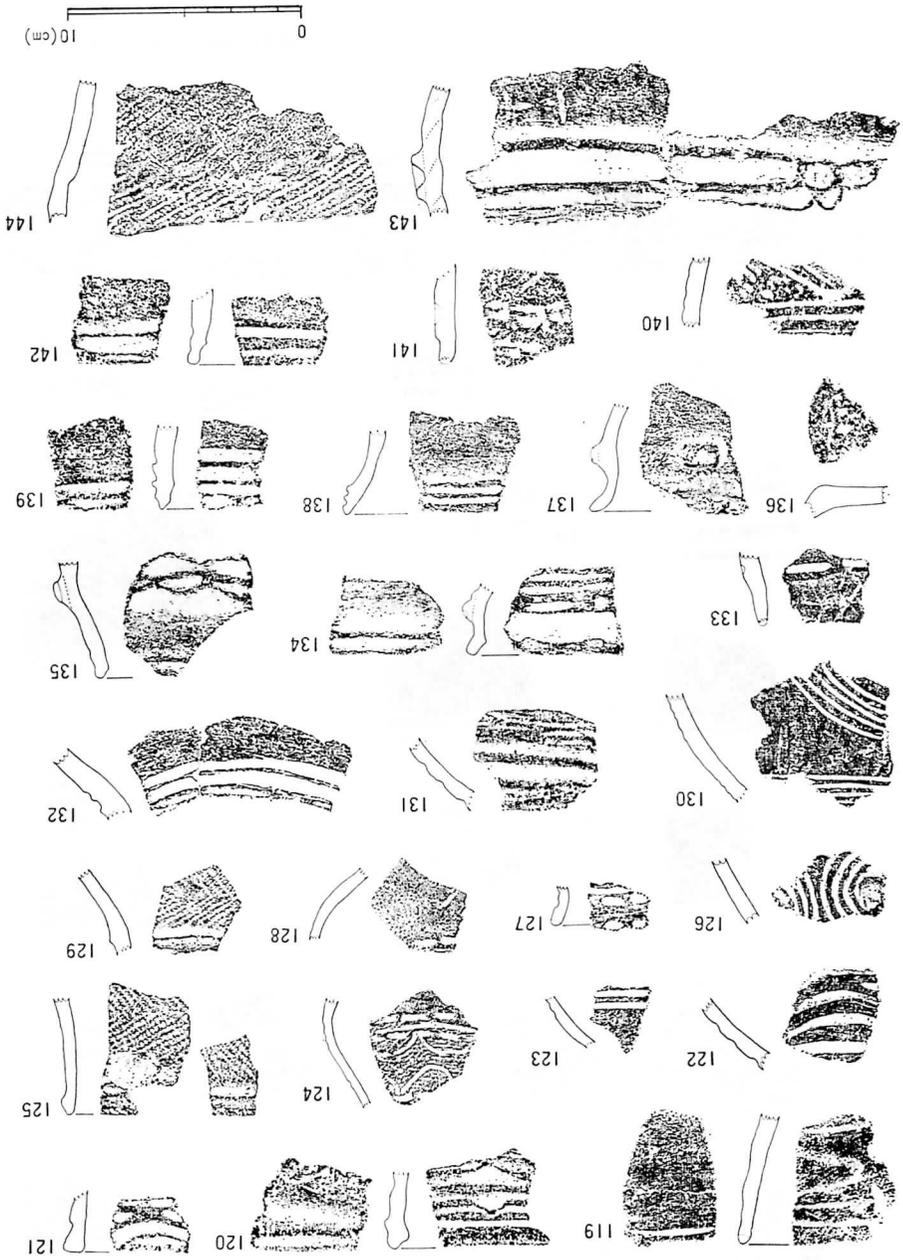


図10 : 出土土器 (88—118)

图11：出土玉器 (119—144)



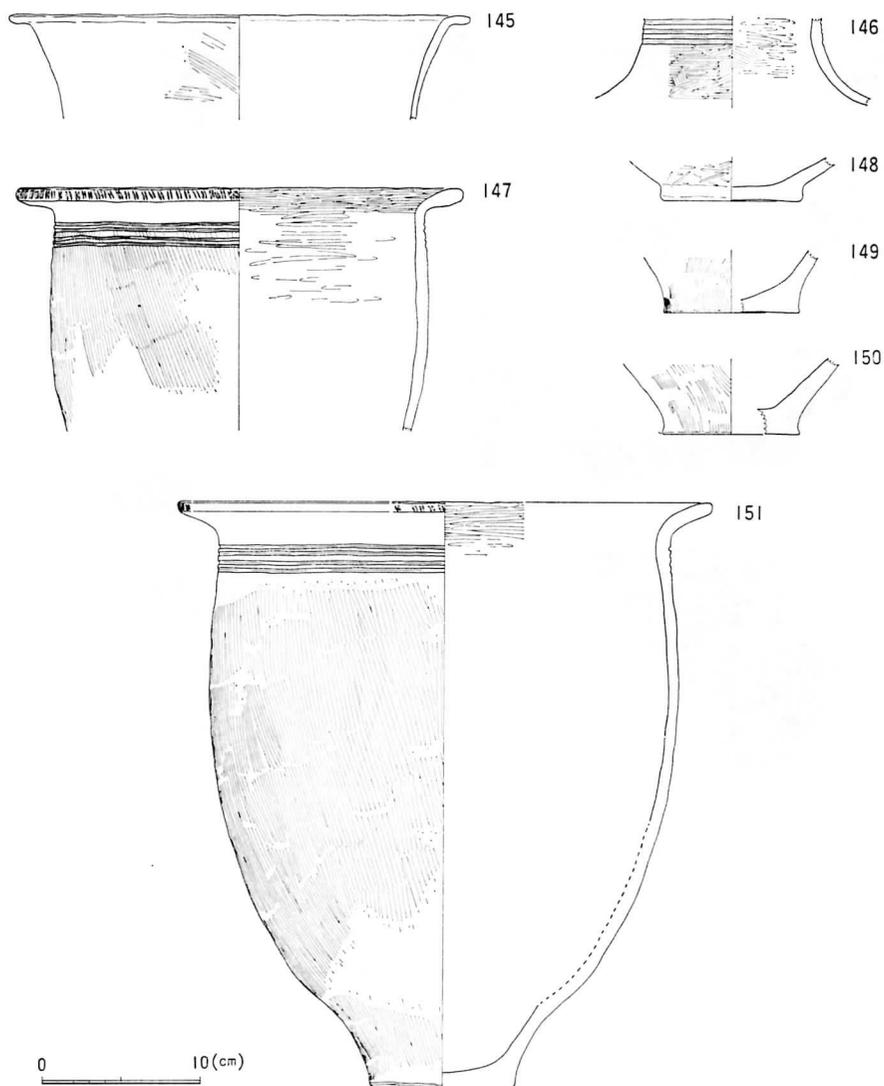


図12：出土土器 (145-151)

皿 (119)

1例。沈線の中に磨消的縄文が認められるが、磨滅により不明瞭である。

第5類 その他の精製土器 (図7: 46, 図11: 137-144)

46は、内外面にミガキが加えられた鉢または無頸の壺だろう。136は精製土器ではないが網代痕がみられる。137は胴部の瘤状突起に指の押圧を加えた鉢か浅鉢でやや特異である。138の内外面にはミガキが加えられ、口縁には棒状工具または半截竹管で深い波線をひき、器形は壺とみられる。139・142の内外面に沈線を見るが、器形は不明である。140・141は半

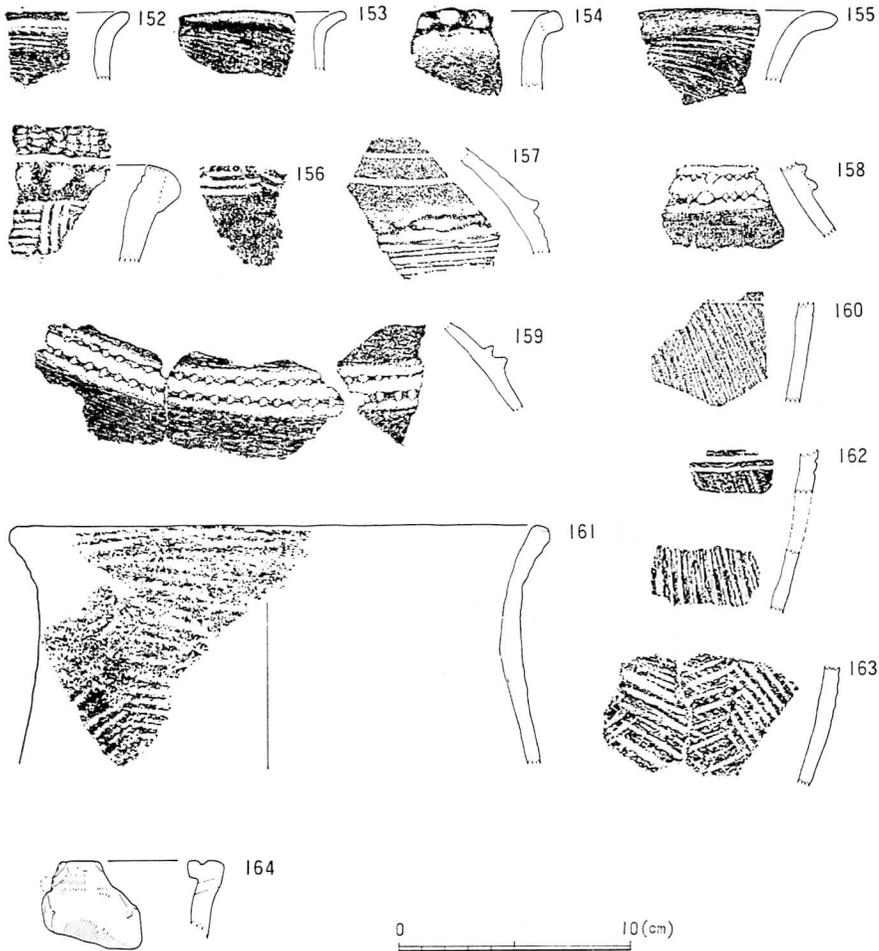


図13：出土土器（152—164）

截竹管を用いている。140は沈線と刺突，141は押し引きを施している。141は馬見塚遺跡に類例がある。144は縄文があり，深鉢と推定される。

注口（図7：50・51）

2点とも口縁部が欠けた手づくね法による注口だが，50には顕著な輪積み痕がある。

底部（図7：52-71，図11：136）

磨滅が甚しく調整等の観察が困難だった。61-64は削痕を残し，上げ底を含む。66・68・70・71は内外面にミガキが加えられ，壺の底部とみられる。

弥生式土器（図12：145-151，図13：152-163）

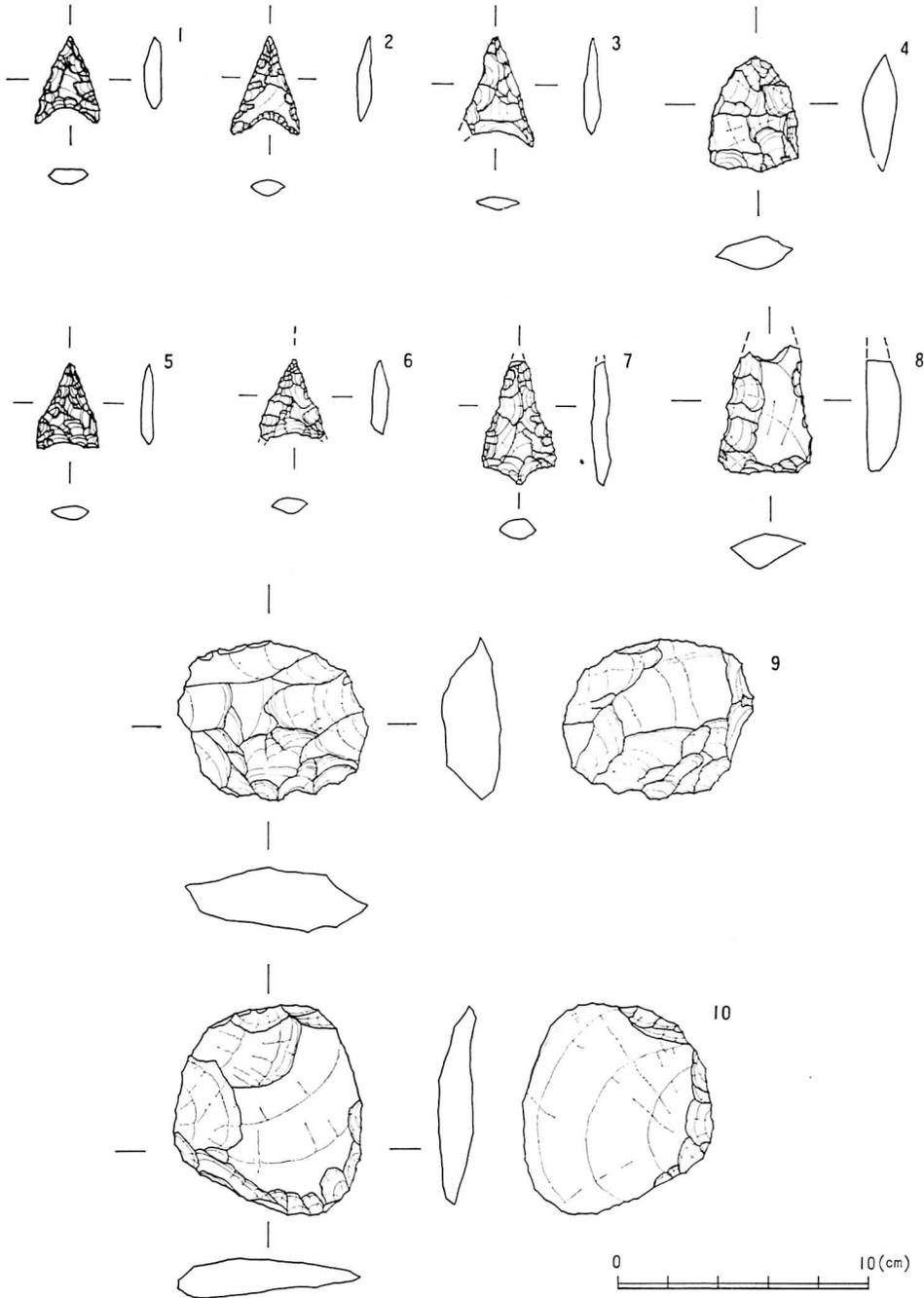


図14：出土石器（1—10）

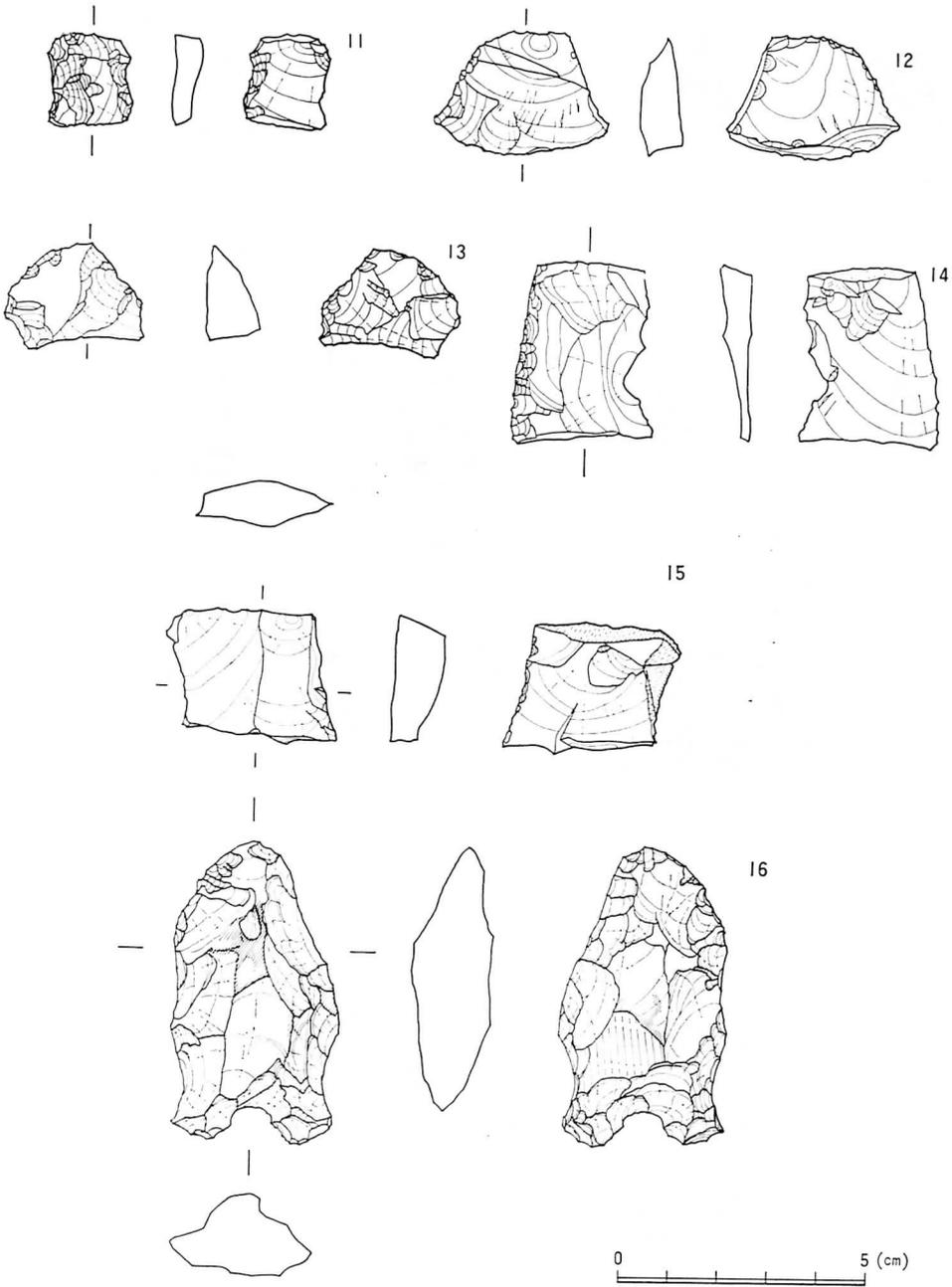


图15：出土石器（11—16）

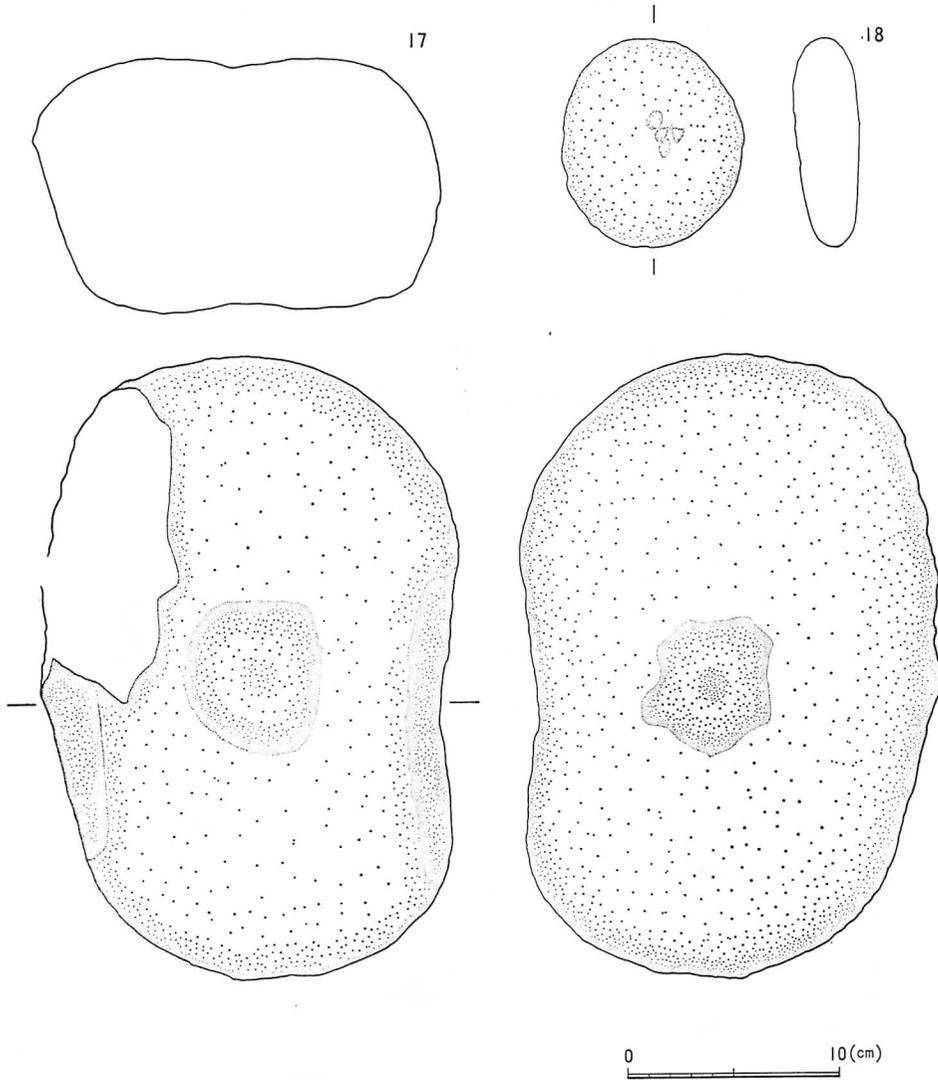


図16：出土石器 (17-18)

遠賀川系および条痕文系の弥生式土器が出土した。後者はいずれも水神平式であろう。

遠賀川系 (146・147・151-159・162)

146は刷毛目整形後へらによる沈線・ミガキを加えた壺の頸部である。147・151は、刷毛目整形を施し、半截竹管沈線を2組、同じく半截竹管による口縁刻みを加え、口縁内側にミガキのある甕である。151では底部にもミガキがある。147・151と同様の半截竹管使用が尾張・三重(納所遺跡)に見られるので、この二点を遠賀川系の在土器とみてよいだろう。162の沈線は半截竹管使用かどうか不明であり、口縁の肥厚形態から、遠賀川系の新しい部分に相当すると判断されよう。

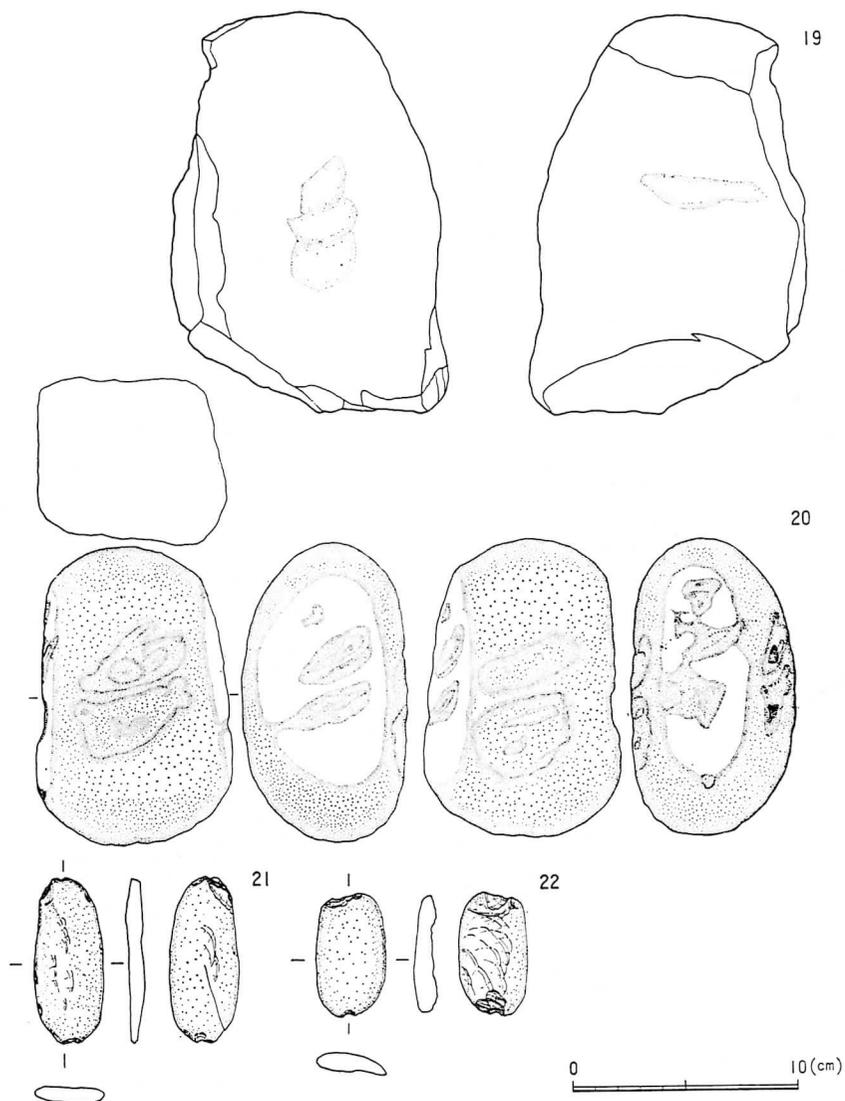


図17：出土石器（19—22）

157-159は壺で、3例とも新しい部分に相当する遠賀川系の在り土器である。貼り付け突帯上に、157ではへら描沈線・指圧痕、158・159ではへらによる刻みを認める。

水神平式（156・161・163）

156は、貝殻で施文され、口縁端部に貝殻押し、同内側に貝殻条痕を残し、突帯上に指圧痕があり、水神平式—中段階の壺の口縁だろう。161・163は、棒束状工具ないし半截竹管による条痕を残し、口縁に刻みのある甕である。これらの水神平式土器の出土地点・層序から遠賀川系土器との伴出状況を把握するのは極度に困難である。

その他の弥生式土器（145・148-150・152-155）

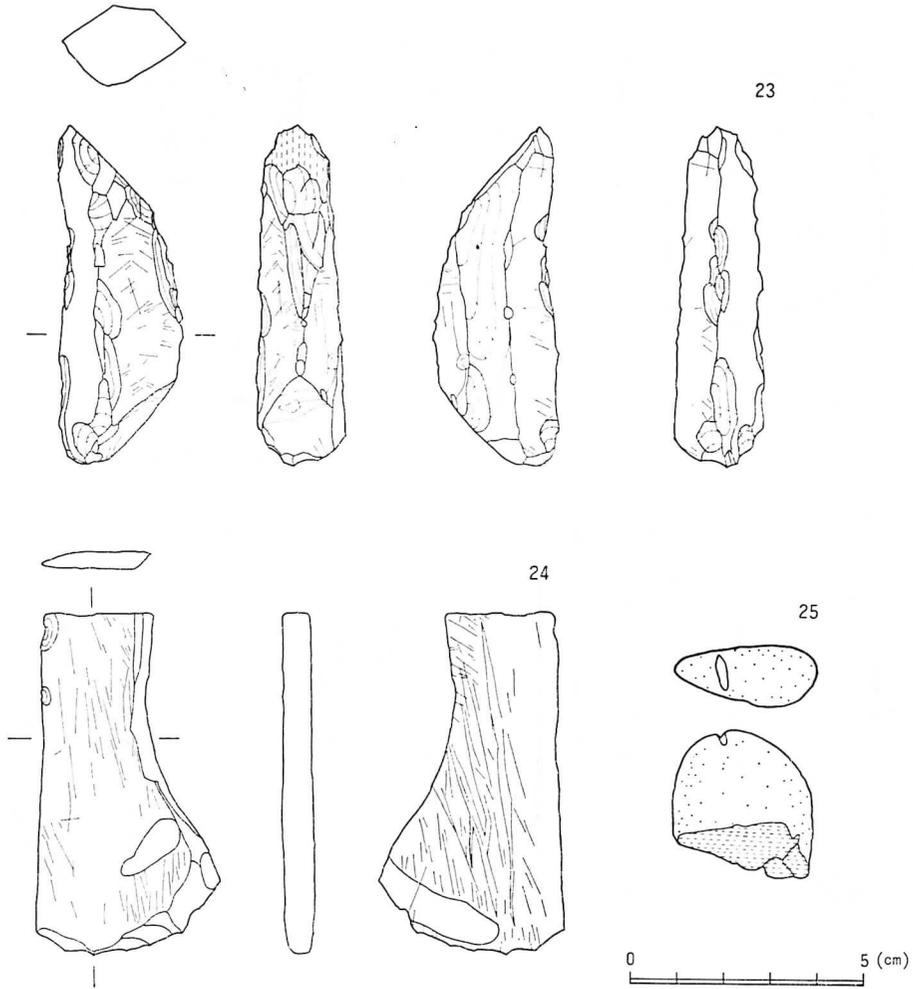


図18：出土石器 (23-25)

145・152・153・155は刷毛目整形され、煤の付着が顕著である。154では口縁端部突帯に指圧痕があり、見田町期に比定できるかもしれない。148の胴・底部外面にはミガキ、内面にはナデが認められる。149・150の胴部外面は刷毛目整形、内面に149でナデ、150でミガキを認める。

土師器 (図13: 164)

1例のみを図示したが、坏・甕の破片らしい3-4例が出土した。いずれも胎土・調整等から土師器と判断したが時期は不明である。端部にへらによる沈線のある164は、穿孔のみられる刷毛目整形による口縁部破片である。

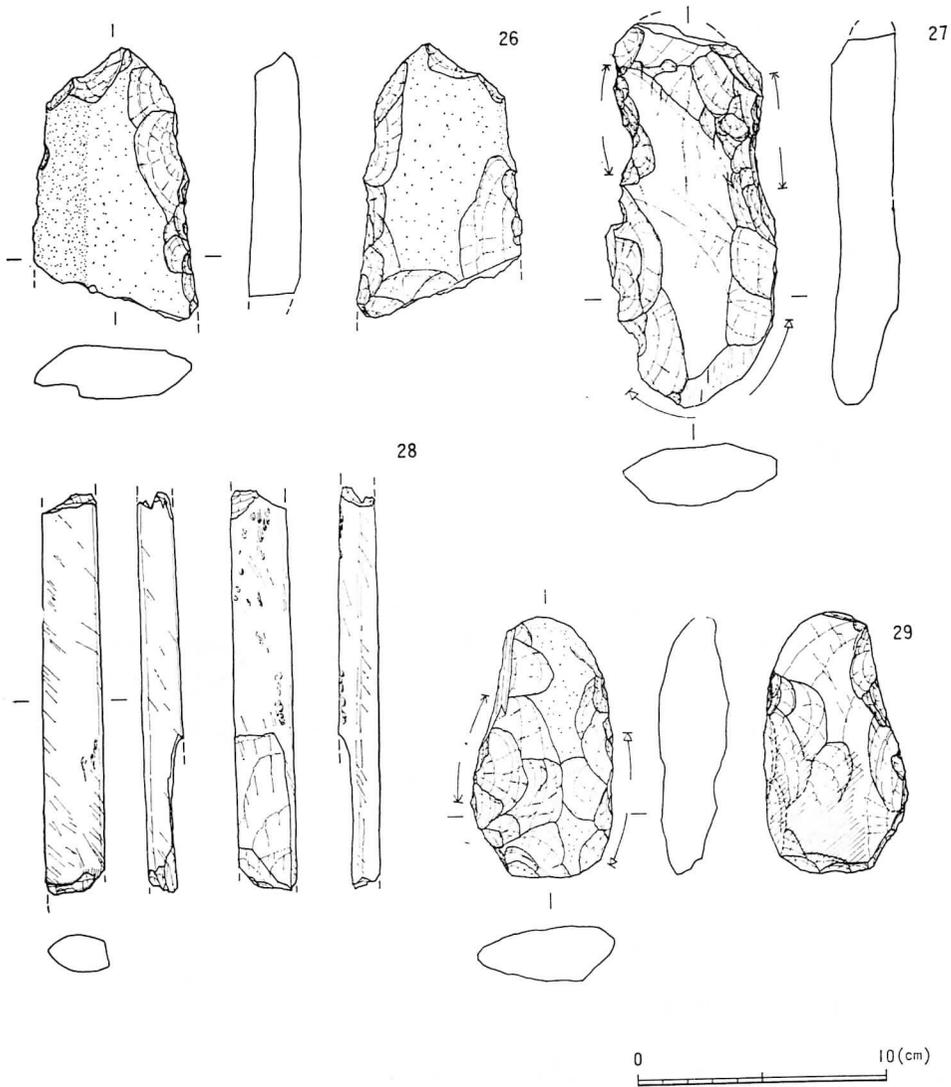


図19：出土石器（26—29）

石器

石鏃（図14： 1—7）

1—3はチャート製無柄石鏃（他に欠損品1点），4は三角鏃（赤チャート製：他に未成品1点），5（黒耀石製），6（チャート製）は一方の肩部にはり出しのある無柄石鏃，7は両側の肩部にはり出しのあるチャート製有柄石鏃である。上記9点の他に未成品・欠損品・排土中よりの採集品が各1点ずつある。

石槍（図14： 8）

チャート製の表面採集品で，両面に一次剝離面が広く残り，基部に作り出しがない。

削器・搔器（図14： 9・10）

9はチャート製ラウンド・スクレーパー。10は細粒砂岩製で部分的調整にとどまるが、9に準ずる。

調整痕のある剝片 (図15: 11-15)

11 (チャート製) は急角度の調整 (他に類例1点あり) ・扶状調整を特徴とする。12・14 (チャート製) では左側辺への主剝離面からの調整がみられる (類例2点)。13 (チャート製) も扶状調整による (11を除き類例2点)。15 (チャート製) のように上記の特徴のないものが15以外に7点ある。11・13・14はスクレーパーかもしれない。

異形部分磨製石器 (図15: 16)

チャート製で両面の稜・縁辺が磨滅している。東海、特に美濃の縄文時代の早い時期の特徴の石器なので、ツメ形文土器 (図3: 1-3) に共伴するのかもしれない。

敲石・磨石・凹石・石皿 (図16: 17・18, 17: 19・20)

円礫型の敲石4点と円礫半割型の敲石が4点出土した。磨石は1点出土した。17は両面に丸い凹みのある閃緑岩製の凹石で、今回の出土遺物中最大である。18は片面に数個の小さな丸い凹みのある斑レイ岩製の凹石、19は両面に線状の凹みのある中粒砂岩製の凹石、20も中粒砂岩製の凹石だが4面に複数の線状凹み、うち2面の一部に磨り面が認められる。この他に石皿の断片らしいものが出土した。

石錘 (図17: 21・22, 図18: 25)

21・22は薄い楕円礫の両端に数度の剝離を加えた泥岩質砂岩製の石錘、25は細粒砂岩製の切り目石錘の破片である。

砥石 (図18: 23・24)

23は三面に磨滅・擦痕がある五角柱状の凝灰岩質泥岩製の砥石である。24は両面に多数の線状擦痕のある凝灰岩製の砥石である。

石斧 (図19: 26・27・29)

26は、楕円礫縁辺部のみに調整を加えた細粒砂岩製の大型品の破片である。27は、短冊形で着柄部にわずかに挟りがある中細粒砂岩製品である。29は中粒砂岩製で器長に対する器厚の割合が26%とやや厚い。この他4点の出土例があった。

石刀 (図19: 28)

千枚岩製磨製。刀身部のやや大きな破片だが、全体の形状の復元はやや困難である。

鉄器

中央部中央から三点が集中的に出土した。この地点ではⅢ層が薄く、層位の識別が困難だが、Ⅱ層から出土した歴史時代遺物とみてよい。

土製品

土錘が一点出土した。

ま と め

本遺跡では、もともと厚くない遺物包含層が近世・近代の耕作等により甚しく攪乱されている結果、調査が難行しそうなことが当初から予想された上に、長期的調査の初年度にあたるので、各種の不馴れも少なくなかった。遺跡の中心部と予想した区域を発掘調査したが、住居址等の遺構が出土せず、遺物も予想より長い期間におよぶ各時代に属するものが縄文晩期遺物を除けば散発的に出土し、出土地点・層序ともに各時代との関連を考えにくいので、本遺跡の性格を究明するには1987年度の調査成果をまたねばならないのが現状である。しかし、関係方面の協力により、これらの困難をのりこえて、縄文晩期遺跡としての本遺跡の概要を探るとの1986年度の調査目的は十分に果せたと考える。

参 考 文 献

- 岐阜県教育委員会 1985『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』岐阜県教育委員会
- 篠田 通弘 1981年「岐阜県揖斐郡徳山村の遺跡」『古代文化』33(1)pp. 30—46
- 1986『大昔の徳山村—縄文人の息吹きを追って』徳山村教育委員会